

県中教研 道徳部会だより

第 34 号

発行日 平成31年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 作道 正也
題 字 金山 泰仁 先生

言葉のキャッチボール

指導主事 柿埜 哲男

「先生と言葉のキャッチボールがしたい！」以前、私が関わった生徒がクールダウンをしている時によくつぶやいた言葉である。「自分の言葉をしっかり受け止めてほしい」「本音で話し合いたい」という思いが込められている。この言葉は今でも私の心に強く響いている。

いよいよ来年度から中学校でも道徳が「特別の教科」化される。いじめの問題への対応の充実等の観点からも、どのように指導し、評価をすればよいか不安に感じている方も多いのではないだろうか。道徳の授業を考える上で「登場人物への自我関与が中心の学習」「問題解決的な学習」「道徳的行為に関する体験的な学習」等の質の高い指導方法が話題にされることが多い。もちろん、指導方法を研究することは大切ではあるが、まずは生徒と教師が本音で語り合い、互いの思いを受け止め合う「言葉のキャッチボール」ができる学級づくりが大切ではないだろうか。

昭和33年に道徳の時間が特設となり、60年間変わらず受け継がれてきた「共に考え、共に語り合う」という道徳教育の本質を物語る大切な言葉がある。言葉のキャッチボールを通じて生徒と教師が人間としての生き方を共に考え、語り合い、道徳的価値の理解を目指していくことはこれからも変わることはない。今回の改訂は指導方法の一新を意図したものではなく、工夫や改善を加えながらより道徳性を育てていくことがねらいである。

今までどおり教師がねらいを達成しようと、生徒と共に考え、悩み、感動を共有するという姿勢を大切に、魅力ある充実した道徳科の授業にしてほしい。そして、教師が「その意見に驚かされたよ！」と認め励まし、生徒が級友の意見に「なるほど、そうなんだ！」と感嘆の声を発するなど、生徒が心の内面にあるものを深め、道徳的価値に迫ることができるよう努めることが求められる。

(西部教育事務所)

生徒の心に響く道徳の授業を

部長 作道 正也

新学習指導要領の告示以来、本部会でも道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」を目指して研究を進めてきましたが、いよいよ道徳が教科となる平成31年度がやってきます。

「考える道徳」、「議論する道徳」について考える時、思い出す授業があります。それは私自身が小学生の頃に受けた担任の先生の授業です。どんな資料だったかなど、内容は忘れてしまいましたが、各面ごとが三色に色分けされた紙製の三角柱を机の上に置き、自分の立場を明らかにしながら話し合ったこと、自分の意見が変化するたびに三角柱の向きを変えたこと、授業の後の休み時間、まるで授業の続きのように級友と真剣に話し合ったことなど、40年以上が過ぎた今でも、はっきりと覚えています。あの時、あの授業を受けた児童全員がそうであったかどうかはわかりませんが、間違いなく私は「考え・議論する道徳」の授業を受け、道徳的な課題を自分自身の問題と捉えていました。その後、教員となった自分には恩師と同じような授業はできませんでしたが、常にあの時の授業を目標にしていたように思います。

さて、指導要領解説、改訂の経緯には、「～『考える道徳』、『議論する道徳』への転換を図るものである。」(下線筆者)という表現があります。そのため、従来の授業から何かを変えなくてはいけないような印象を受けがちです。しかし、これまでも「考え・議論する道徳」の授業は行われていました。大切なのは新しいことをするのではなく、これまで積み重ねられてきた成果を受け継ぎ、着実にやっていくことではないでしょうか。教科化初年度に際し、温故知新の精神をもちながら、教科化に至った経緯を理解し、教科用図書の使用を基本にして、年間指導計画に沿った授業実践に心がけたいものです。

(富・山田中)

第62回 研究大会報告

東 部 地 区

富山市立大沢野中学校

<第2学年> 前田 邦博 教諭

主題 目標に向かう意思 A

教材 「限界に挑み続ける」高木美帆



高木選手の経歴を振り返り、彼女の挫折や心境の変化を捉えた。苦しさを経験しながらも前向きに目標設定を行い、困難を乗り越えようとする高木選手に焦点を当てて授業が進められた。自作の年表資料を用いて、生徒の視覚に訴える手法で生徒の興味関心を高めた。また、中心的な発問では映像を活用し、高木選手の思いを捉えさせた。

海見純指導主事からは、以下の助言をいただいた。

- ・生徒と授業者との関係ができており、クイズ形式で生徒に興味をもたせる導入や、安心してつぶやいて意見が言える環境がよかった。
- ・映像資料は一回きりで、振り返ることがなかなかできない。映像にはそのよさがあるが、どの場面を切り取って、授業のどのタイミングで流すのが大事になってくる。書かれていることを土台として授業展開できるのが読み物資料の利点である。それぞれの資料のよさを生かして授業を仕組んでいくことが大切である。

藤井 翔太 (滑・滑川中)

<第3学年> 宮下 大樹 教諭

主題 誠実な心 A

教材 「ネット将棋」(出典：私たちの道徳)

相手に対して誠実に向き合えない「僕」の気持ちを自分ごととして捉えるために、部活動での挨拶体験を振り返らせ、生徒の体験に基づいた多様な意見を引き出した。また導入では、藤井棋士が連覇を阻まれ、「参りました」と頭を下げる写真を見せるなど、ICTを効果的に活用していた。



齊藤紀子指導主事からは、以下の助言をいただいた。

- ・明るく温かい雰囲気、互いに意見を言い、聞き合う姿勢が授業を行う前提である。
- ・他者の意見を聞き、考えることで自分の意見が明確になり、交流(議論)することでさらに考えが明確になる。本音を語らせたいときは、グループが有効である。
- ・教材のねらいを明確にし、そのねらいに迫るための指導方法を吟味する。
- ・発問は、「多面的・多角的」に、「自分ごと」として考えられるように仕組む。

青谷 花代 (黒・桜井中)

〔研究主題〕 主として自分自身に関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳の授業はどうあればよいか。 —道徳的諸価値の理解を深める発問の工夫—

西部地区

高岡市立南星中学校

<第1学年> 筏井 実咲 教諭

主題 くじけない心 A

教材 「木箱の中の鉛筆たち」

中心的な発問では、最初に数名の生徒に考えを発表させた後に、各々の生徒にワークシートを使って書く時間を設定したことで、生徒は見通しをもってじっくりと考えることができた。そのことが多様な意見の表出につながった。終末では、教材に書かれている内容を自分事として捉え、今後の自分の生き方について真摯に向き合うような記述、発言がいくつも見られた。部会協議では、導入のアンケート結果を図示すると、さらに生徒の興味・関心を高められるのでは、という意見や、「ちびた鉛筆」が登場した時点で、父の努力や困難について考えさせ、中心的な発問につなげていくとよいのでは、という意見も出された。

高岡陽子指導主事からは、以下の助言をいただいた。

- ・板書は、キーワードを囲んだり線でつないだりすると考えの多様さが視覚的に捉えやすくなる。
- ・考えを深めたいところでは、「なぜそう考えたか」理由を問い返すと効果的である。理由の中に根拠となる自分の体験や思いが含まれることも多いため、自分との関わりで考えている姿が期待できる。

八下田道子（小・津沢中）

<第2学年> 小川 智秋 教諭

主題 着実にやり遂げる心 A

教材 「ロスタイムのつづき」

導入で登場人物の写真や経歴を提示したことで、登場人物を理解しやすくなった。中心的な発問では、生徒の発言への問い返しが、多様な考えを引き出すことにつながった。部会協議では、道徳的諸価値の理解を深める発問を工夫するため、中心的な発問や問い返しの発問はどうあればよいかについてグループで話し合われた。

小川直子指導主事からは、以下の助言をいただいた。

- ・筆者の生き方が変化した心情に迫るため、中心的な発問までに筆者の気持ちについてよく考えておくことが大切である。
- ・生徒の多様な考えを引き出すために、ペアやグループで話し合うなどの学習形態の工夫も必要である。
- ・板書は、生徒の思考を深める重要な手がかりになる。対比的に示したり、構造的な工夫をしたりすることが有効である。

但田 朋絵（南・井口中）

<第3学年> 中村 昌寛 教諭

主題 思慮深い判断と責任 A

教材 「傘の下」

授業では、ワークシートを活用して自分の考えを整理させるための時間が確保され、丁寧な机間指導は意図的な指名に生かされていた。また、ねらいに関わる生徒の発言をキーワード等で簡潔に板書し、構造的に示す工夫がなされていた。部会協議では、「道徳的諸価値の理解を深めるには、ねらいとする価値に迫るために、ねらいに関わる発言を掘り下げ、問い返しの発問や補助発問を工夫するとよいのでは」等の意見が出された。

柿埜哲男指導主事からは、以下の助言をいただいた。

- ・中心的な発問は、主人公に自我関与して、自分との関わりで考えることができる発問だった。
- ・「傘の下」という資料名の意味や、登場人物の行動や台詞など、資料に隠された作者の思いを教師が読み込み、補助発問等に生かしてほしい。
- また、道徳の評価については、自分自身との関わりの中で深めているか、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているかに着目して、学習状況を把握することが必要であるとご指導いただいた。

末永亜希子（砺・出町中）

授業力向上のためのアドバイザーによる講義〈要旨〉

第62回東部地区大会

平成30年度東部地区大会では、金沢工業大学基礎教育部教職課程教授の白木みどり先生にアドバイザーとしてご講演いただいた。当日の授業を基に議論へと向かう授業の工夫について詳しく教えていただいた。

1 「特別の教科 道徳」が目指すもの

道徳科での思考経験の累積が、自己判断の基準となる価値観形成に作用していく。多様な見方、考え方は、自由な生き方の選択の根拠となりえる。子ども主体的な考えを大切にするためには、従来の教科の枠組みにとらわれることなく、より効率的、現実的な横断的カリキュラム・マネジメントを模索し、学習内容や活動を関連付けるといった教師各位の工夫が必要となる。そのためには上位の教育概念であるキャリア教育と道徳教育の相互補完が重要である。生徒全員を道徳授業のステージに乗せ、生徒が多様性の中から新たな発見や自分事として思考できる授業を通して、一人一人のよさや成長を評価することが求められる。

2 評価について

生徒一人一人の特質を捉え、日々そのよさを褒め、成長を認めるものである。全ての生徒に花マルをあげることができるのが道徳だが、授業のねらいと着地点に整合性がなければ、むしろ危険を招く。そのためにも精選された中心発問の設定が大切である。

3 教材分析について

導入や補助資料の工夫を図ることで、生徒はワクワク感をもって道徳の授業に臨むようになる。生徒の多様な意見や考えを教師が受け止めるためには、教材分析は欠かせない。タイトルを黒板の中央に置き、人物のポジションを考えながら分析してみることは、構造的な板書づくりにつながる一つの方法である。

明野 淳子（富・岩瀬中）

第62回西部地区大会

平成30年度西部地区研究大会では、元関西学院大学教授の横山利弘先生にアドバイザーとしてご講演いただいた。道徳科で養うべき資質や道徳教育の進め方、評価についてなど、幅広い内容について教えていただいた。

1 道徳科で養うべき資質について

道徳科は、合意形成をするものではなく、よりよく生きるための道徳性を養うものである。道徳教育で養うべき基本的な資質とは、多様な価値観に誠実に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢である。そのためには、児童生徒が持ち前、本領を発揮し、人とつながることができる「楽しい」授業を行うことが大切である。

2 道徳教育の進め方

児童生徒の心に寄り添うためには、生徒の心の中にある動きや判断を聞くことが必要である。授業開始時点から終了時までには生徒の道徳的価値の理解がどう変わったか、生徒が当事者になったつもりで心の内を考えていたか、友達の意見をよく聴き、自分の意見を語れたかを知るためには、teachよりもcatchを心がけ、対話（意見交流）のある授業が必要。教材は、素直に一読し、道徳的価値を把握した後、ストーリー、登場人物の心、道徳的価値の構図を明らかにして読む。読む速さは、生徒の思考のスピードに合わせるとよい。教材を使いこなす力を付けるために、複数教師で指導体制をとるローテーションを勧めたい。

3 道徳科の評価

生徒の発言（板書や授業記録）や書いたもの、表情等から子供の変化に目を向け、個人を認め、励ますものにする。教育の本質は愛である。心をこめて短い恋文を書くように、授業者ならではの愛情のこもった評価文を書いてほしい。

栗原 千恵（氷・西條中）